

視察用

様式(細則 5-2)

平成 29 年 9 月 28 日

浜田市議会議長
西 田 清 久 様

議員名 串崎 利行



調 査 研 究 活 動 報 告 書

下記のとおり調査研究のため視察等を行ったので、その結果を報告します。

記

1. 期 間 平成 29 年 8 月 22 日 (火) ～平成 29 年 8 月 24 日 (木)
2. 視察先および研修テーマ
 - (1) 場所 宮崎県日南市 子育て支援センター
内容 日南市子育て支援センター「ことこと」の取組について
 - (2) 場所 宮崎県高千穂町 高千穂町役場および秋元集落
内容 世界農業遺産、伝統芸能の継承の取組について
地域資源を活かした取組について (秋元集落)
3. 参加者 飛野弘二、上野茂、串崎利行、平石誠、西田清久
4. 調査経費 158,495 円 / 5 人 = 31,699 円
内訳 旅費 83,695 円 宿泊費(体験料含む) 74,800 円



5. 調査研究活動の概要

① 日南市 子育て支援センター「ことこと」の取組について

平成 29 年 8 月 22 日(火) 15:00~17:00

こども課長：黒岩保雄氏 子育て支援センター所長：藤井真由美氏

(内容)

(1) 施設整備の背景

- ・ 中心市街地活性化事業（平成 24 年 11 月から平成 28 年度末）の一環で整備。
- ・ 計画策定段階での市民の意見、要望などは次の通り。
 - 市民アンケートでは、必要な施設の最多は大型商業施設 21.8%、子育て支援施設も 14.0%。
 - 子育て世代のアンケートでは、遊具のある屋根付屋外スペースが第 1 位 17.5%、子育て支援センター 13.3%、地域住民も一時預かり機能充実、子育て環境充実を希望。
- ・ 東京おもちゃ美術館と「ウッドスタート」共同宣言（平成 27 年 1 月）
 - 市内の 3 ヶ月児全てに「うごくぞー」（象の形をした木の遊具）を贈呈
 - 市内小学 1 年生に「日南キューブ」（飢肥杉製の積み木）を贈呈
 - 東京おもちゃ美術館の多田館長の日南市での講演、木育ひろばを紹介

(2) 施設の概要

- ・ 子育て支援センターは民間施設の一部を賃貸している。
日南まちづくり㈱が所有する「Ittenほりかわビル」にテナントとし入居
- ・ 「ことこと」の整備費および運営費
 - 整備年度 平成 27 年度（設計）、28 年度（工事）
 - 経 費 160,070 千円
 - 設計、管理費 18,201 千円
 - 工事費 141,869 千円
 - 財源内訳 国の交付金 71,200 千円（社会資本整備総合交付金）
 - 起債 79,900 千円（児童福祉施設整備事業債）
 - 一般財源 8,970 千円
 - 運営費 17,213 千円（平成 29 年度当初予算ベース）
- ・ 施設面積、駐車台数
 - 施設面積 564.30 m²（171 坪）
 - 駐車台数 一般利用者スペース約 60 台（立体駐車場）利用者 2h 無料
- ・ 家賃等
 - 家 賃 1,080,000 円(税込)/月
 - 共益費 184,700 円(税込)/月（ことこと 1 ヶ所分）
 - 駐車場 立体駐車場利用者 2 時間まで無料の発券 1 枚につき 10 円を負担。* 立体駐車場運営に対する補助金 100 万円/年を市が負担。
- ・ 施設の特徴
 - 当初は、子どもに人気のあるキャラクターを活かしたミニ遊園地を想定
 - 東京おもちゃ美術館長講演、飢肥杉産地、ウッドスタート宣言により木育を特化

- 購入したおもちゃ以外は、内装材を含め全て飢肥杉
- 設計、管理は東京おもちゃ美術館の木育ひろばを設計した㈱パワープレイス（東京）
- スギコダマなどの製作に市民がボランティアで協力
- 木育ひろばとしての規模は日本一
- 工事はすべて市内業者、おもちゃの購入先はすべてグッドトイ委員会

(3) 職員体制

・ 正規、嘱託職員、資格者

- 正規保育士 4名（所長1名、主任保育士2名、保育士1名）
- 嘱託保育士 2名
- 嘱託看護師 1名
- 嘱託子育て支援員 1名
- 再任用保育士 1名

* 職員の代休、振休等もあり常時7～8人で対応。勤務は時差出勤のシフト制

(4) 施設の機能

- ・ 遊び場と交流の場の提供
- ・ 一時預かりの実施

開設日9時～21時まで対応。有料：500円/2hその後30分ごとに150円追加

- ・ ○ 子育て等に関する相談、援助 ○ 情報提供、講座の開催
- 木育サポーターの養成

(5) 利用状況

平成28年まで市内2ヶ所にあった子育て支援センターの合計利用実績

平成27年度 12,855人、平成28年度 10,791人

「ことごと」運用開始平成29年4月8日～7月31日までの利用実績14430人

平成29年度の利用見込みは20,000人であるが、実際は大幅に増。

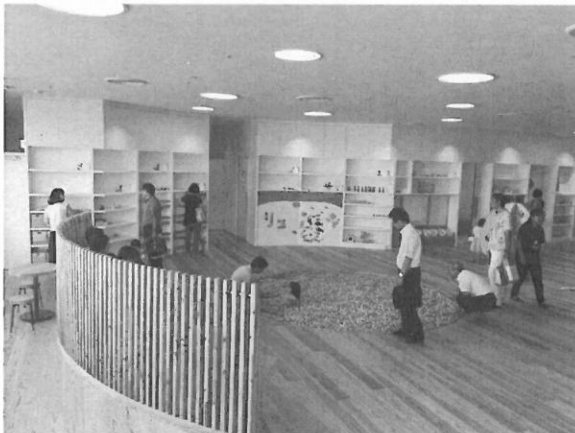
施設の噂等で市内外、県外からの利用も増加しているとのこと。

(6) 利用者の評価

- ・ 家ではぐずっていても、「ことごと」にくると泣き止んで遊ぶ。
- ・ 「ことごとに行くよ」というと、すぐに準備するようになった。
- ・ 幼稚園より「ことごと」が好き。
(幼稚園に行かないと「ことごと」には行けないと言うと、素直に行くようになった。)
- ・ 知り合いが少ない利用者に対する職員からの情報提供、同世代との出会いの機会はあるがたい。

(所感)

施設の中に入れば、木育ひろばとしては日本一と言われた通り、木の匂い、そしておもちゃ全てが木で出来ており心が和み、たくさんの親子が楽しそうに過ごされていた。浜田市は、子育て支援センターの移転計画がある中、林業の振興を目指している。西部山村振興財団を中心に広葉樹の推進も進めている状況であり、今回の日南市子育て支援センターの木育ひろば等は、非常に参考になると感じた。



② 高千穂町 世界農業遺産、伝統芸能の継承について

平成 29 年 8 月 23 日 (水) 13 : 30 ~ 17 : 00

高千穂町議会議長：佐藤節生氏

議会事務局局長：佐藤英次氏

総合政策室室長：甲斐宗之氏

総合政策室主事：田崎友教氏

(内容)

高千穂町は天孫降臨の地としての誇りをもち、氏神様や山の神・水源神をはじめ、野山のいたるところに祀られている神仏への祈りを糧に、山の峽に拓かれた狭い田や細長い畑を有効に活かしながら、農村景観の保全を図るとともに、夜神楽をはじめとする高千穂特有の生活文化を大切に受け継いでいる。そうしたことから、平成 27 年 12 月 15 日「高千穂郷・椎葉山の山間地農林業複合システム」が世界農業遺産に認定された。認定内容として、本地域は山腹用水と棚田、木材生産、椎茸栽培、茶、肉用牛、焼畑という伝統的な農林業と村落共同体を維持する伝統文化「夜神楽」がその要旨である。

世界農業遺産認定の目玉として「神楽」が重要視されており、認定区域内の 5 町村に 87 の神楽保存会が存在しているとのこと。そのうち、高千穂町内では 30

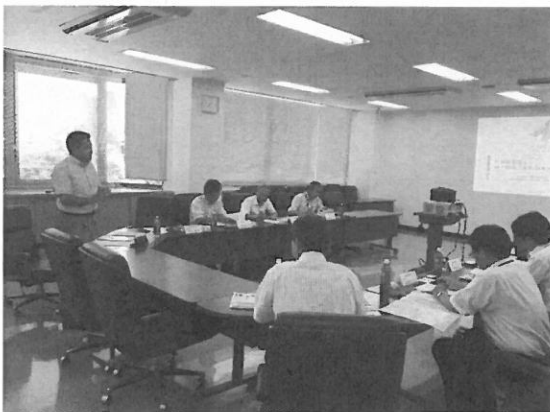
の保存会があり、関係者（奉仕者）は462名で高千穂町内の男性人口の7.6%相当する。（視察当日の説明員で出席の担当者も神楽関係者とのこと）

平成28年度の夜神楽公演の実績は、平成28年11月12日～平成29年2月11日までの19公演開催されている。公演場所は町内の公民館が主で、中には個人宅での公演も実施されており、当市との違いが感じられた。

本年8月には、町内30の保存会などが参加して、「夜神楽伝承協議会」が発足し、これまでなかった神楽のネットワーク組織が誕生した。この協議会には、神楽保存会のほか、神社の宮司や氏子総代、町公民館連絡協議会の代表、学識経験者が含まれている。今後、神楽の伝承者育成や、イベントへの派遣事業などを進めるとともに、昨年11月に九州5県の10神楽団体で発足した「九州の神楽ネットワーク協議会」と連携しながらユネスコ無形文化遺産への登録申請を目指すとのこと。

（感想）

高千穂郷・椎葉山地域の世界農業遺産についての説明を聞くと、森林に囲まれ平地が極めて少ない環境の下で、棚田での稲作等の複合システム「米・茶・椎茸・畜産・林業」で生計を立て、標高の高い傾斜地で農業用水を確保するために、500kmにも及んだと話された。又、伝統文化の「神楽」の評価もあり、5町村連携で世界農業遺産に認定された。浜田市も、棚田、複合の農業、神楽もあり、世界農業遺産を目指し、挑戦するべきと思ひ、認定されると地域の活性化に確実に繋がると感じた。



③ 高千穂町 地域資源を活かした取組について（秋元集落）

平成29年8月24日（木）9：00～11：00

民宿まろうど、高千穂ムラたび：飯干淳志氏

（内容）

秋元集落は、40戸100人集落で、集落のほとんどが斜面のため小さな水田が多く、枚数にして100枚以上である。そういった地域で、耕作放棄地の拡大にストップをかけたのが、今回訪問した、民宿「まろうど」である。主の飯干淳志氏が町役場職員時代から思い描いていた、地域活性化策の成功事例として研修させていただいた。

「株式会社高千穂ムラたび」が正式名称で、前述の民宿と「飲む点滴」としてTVで最近話題の甘酒やどぶろくを造っている「まろうど酒造」があるのは、高千穂町の中心から南東へ車で40分ほど走った山深い集落だった。そこでは、主の奥様が民宿を切り盛りし、酒造では10数人の従業員が月5万本もの売上げを誇る甘酒のお化けブランド「ちほまる」の製造に追われていた。驚いたことに、その10数人の従業員の年代は20、30代が中心であり、集落内外から通勤しているとのことであった。視察当日の朝も製造や出荷作業でてんてこまいの様子だった。

ここで製造されている甘酒「ちほまる」は米こうじの甘酒に日と手間かけ、植物性乳酸菌で発酵。優しい甘酸っぱさとすっきりとした味わい。無添加だが常温保存で8ヶ月もつとのこと。折からの甘酒ブームに乗って、美容・健康志向の消費者の心をつかみ、前述の5万本/月の出荷本数を誇っている。販売から3年弱で売上げは年間1億円に迫るとのこと。原料の米は、集落内の棚田で栽培した「ヒノヒカリ」を農家から買い取っており、買い取り価格は農協価格の+2,000円。契約面積は3ヘクタール、100枚以上の棚田からなる。手の施しようの無かった耕作放棄地を見事に解消し、農家所得の向上に繋がられたことには、驚きの連続だった。社長いわく、受注数が日々増加しており、米が不足し、集落外へも手を伸ばしたいが、いろいろと障害があり苦労しているとのことであった。

(感想)

私も山奥に住んでいるが、この道の狭さには驚き、こんな所に民宿もあり、若い方が沢山働いておられると聞き、どこに魅力があるのか不思議に感じた。

話を聞くと、若い夫婦の挑戦が、小さい村から、甘酒のお化けブランド「ちほまる」が生まれ、念願だった若者雇用が実現し、原料の米は、農家から高く購入し、耕作放棄地の拡大を阻止しに繋がりと、農家所得も増え一石二鳥になったと感じた。こうした成功事例をみると、環境ではなく諦めずに、いかにやる気の気持ち大切であり、改めて人材の育成の重要性が大事だと感じた。



